



別冊 1

平成27年2月24日

生駒市教育委員会

教育長 早川 英雄 様

生駒市文化財保護審議会

会長 今木 義法



生駒市文化財指定について（答申）

生駒市文化財保護条例第4条第3項の規定に基づき、平成26年12月11日付生駒市教育委員会第257号で諮問がありました下記文化財について別紙のとおり答申いたします。

記

- 1 有形文化財（彫刻・建造物） 伊行氏関連石造遺物群 4点

答申第1号 ^{いのゆきうじ}伊行氏関連石造遺物群

種別	有形文化財（彫刻・建造物）	
名称及び員数	伊行氏関連石造遺物群	1 括
	一、石仏寺石造阿弥陀如来坐像	1 軀
	光背に観音、勢至両脇侍像を浮彫で表す	
	一、石仏寺石造阿弥陀如来立像	1 軀
	一、石仏寺石造地藏菩薩立像	1 軀
	一、無量寺五輪塔	1 基

所在地 生駒市藤尾町 96 番地
生駒市壺分町 853 番地

所有者 石仏寺
無量寺

時代 鎌倉時代

概要 石工伊派に属する^{いのゆきうじ}伊行氏が制作した石造遺物群である。

伊派は、鎌倉時代の初めに、鑄物師^{ちゅうぶし}陳和卿に従って明州から来日した伊行末を始祖とする宋人石工集団であり、東大寺大仏と大仏殿の再建工事に携わり、その後も日本に居住し各地で石造物の造立活動を展開した。

市内の暗越奈良街道筋には、数多くの石造遺物が残っており、なかでも伊行氏の造像作品が多くみられる。

藤尾町の石仏寺本堂内に安置されている本尊阿弥陀如来坐像は、永仁 2 年（1294）の造立で、本体、台座、光背を別石から造る。光背両脇に観音、勢至菩薩の両脇侍像を半肉彫りで表す。光背面には「永仁二年甲午二月十五日 大願主行佛 大工伊行氏」の刻銘がみられる。同じく堂内に安置される 2 軀の像のうち、阿弥陀如来立像には嘉元 4 年（1306）の刻銘があり、地藏菩薩立像には刻銘はないが、両像とも本尊と作風が似通っており、3 軀とも同じ作者であることが推定される。

壺分町無量寺の境内に立つ五輪塔は、嘉元 2 年（1304）の造立で、地輪部側面に「大工井行氏」の刻銘がみられる。

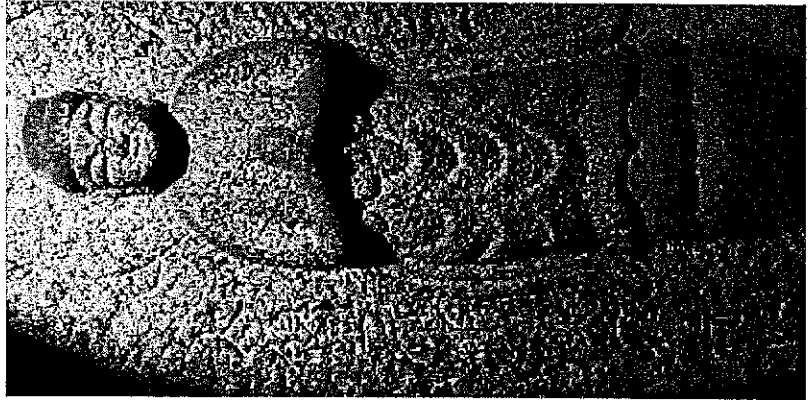
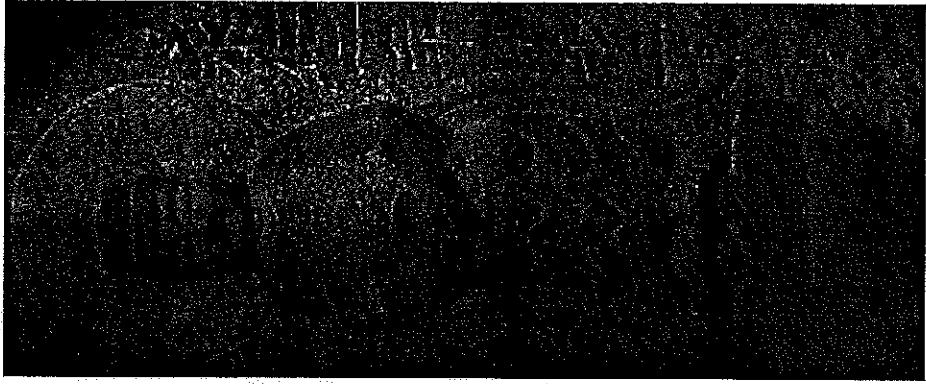
伊派石工の造像の背景には、文暦 2 年（1235）に行基墓所が開掘されたこと

を契機として、行基信仰を広めるようになった律宗僧侶たちの活躍があった。

伊行氏によって制作された石仏寺と無量寺の石造遺物は、鎌倉時代の石造美術史の一端を担う貴重な資料群といえる。

内訳

石仏寺 石造阿弥陀如来坐像	像高 阿弥陀 100.8cm 観音 35.3cm 勢至 35.3cm 光背高 121.4cm 花崗岩製	鎌倉時代	永仁2 (1294)	光背銘 向かって右「永仁二年甲午二月十五日」 向かって左「大願主行佛 大工伊行氏」
石仏寺 石造阿弥陀如来立像	像高 155.5cm 光背高 180.0cm 花崗岩製	鎌倉時代	嘉元4 (1306)	光背銘 向かって右「嘉元四年七月日近住行佛」
石仏寺 石造地藏菩薩立像	像高 138.2cm 光背高 161.5cm 花崗岩製	鎌倉時代	不明	無銘
無量寺 五輪塔 (地輪のみ当初)	総高 86.0cm 幅 54.5cm 花崗岩製	鎌倉時代	嘉元2 (1304)	(南面) 右為二親並 法界衆生 平等利益也 夫以弟子慈 勝 宿因有幸 生佛法流世 (西面) 善果感是 預行基之 益 是則生々 値遇也世々 結縁 也依之 且為報菩提 (北面) 恩徳且為訪 法界衆生 所造立之如 件敬白 嘉元二 年 二月十八日 (東面) 願主慈勝 比丘入西 沙弥願永 尼心阿弥 大工井 行氏



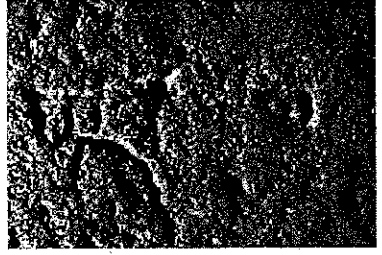
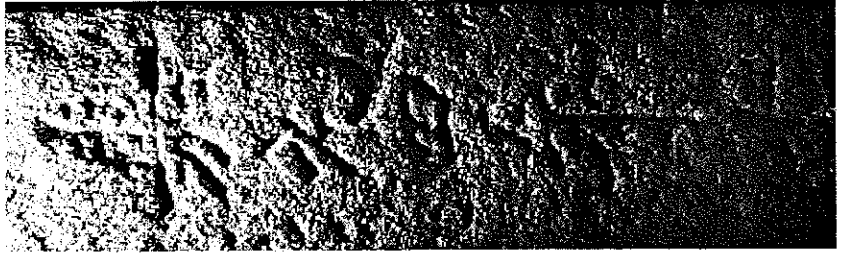
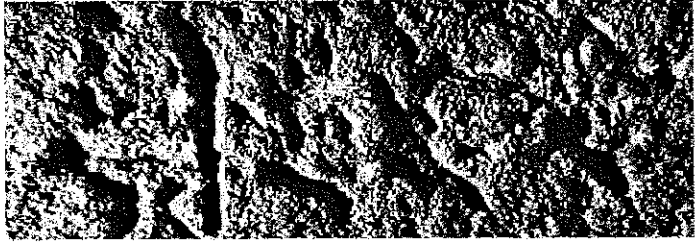
石仏寺石造阿彌陀如来坐像

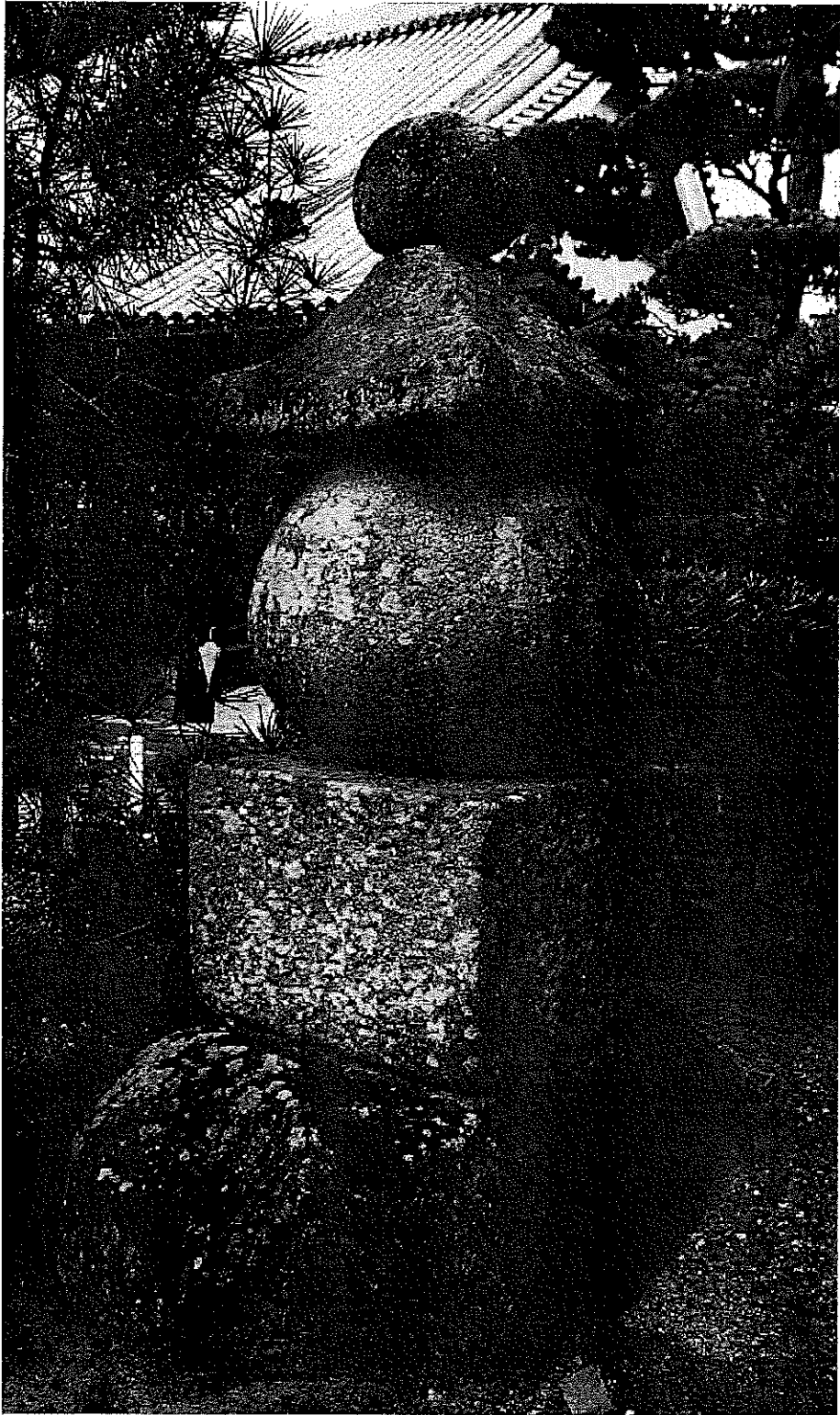


石造地藏菩薩立像



石造阿彌陀如来立像及び刻銘





無量寺五輪塔



地輪刻銘 南面



地輪刻銘 西面



地輪刻銘 北面



地輪刻銘 東面